

## 復活節第三主日

2014.5.4

### ルカ 24・13-35

今日復活節第三主日の福音は、私たちになじみ深いエマオの弟子たちの物語です。ルカ福音書においては、復活されたイエスが最初にそのお姿を示されるのは、今日の福音に語られているこの二人の弟子たちに対してです。その二人の弟子の一人はクレオパという人だったと、その名前が記されていますが、もう一人の弟子のほうは、その名前すら記されていません。クレオパにしる、もう一人の名前の分からない弟子にしる、福音書においてここで始めて登場する弟子たちです。彼らは確かにイエスの弟子であると言われていますが、最初の十二人の弟子たちのように、名指しでイエスに呼ばれて、イエスにつき従って来た弟子たちではありません。それまで、いわば無名であったこの二人の弟子に、復活されたイエスのご自分を示してくださったと今日の福音は私たちに語っています。この物語を伝えたルカ福音書の著者は特別な思いをこめて、この二人の弟子への復活のイエスの現われの物語を記しているのではないかと思います。どういうことかと言うと、それまで取り立ててその存在すら知られていなかったこの二人の弟子の復活の主との出会いの物語を、この福音書の著者は自分自身の信仰体験に重ね合わせるようにして捉え、その上で、同じ信仰を生きようとしている私たちに語っていると思えるからです。この物語を含む福音書の著者は伝統的にルカという名で知られています。けれども、そのルカについて私たちはほんの少しのことしか知ることが出来ません。ルカがどのようにしてイエスの弟子たちの中に加わることになったのかは、どこにも語られていません。その意味では、ルカもまたこの物語の中の二人の弟子たちと同じ立場にいるのです。確かなことは、イエスの復活を語るこの物語は、復活のイエス・キリストを信じる最初の教会の中で、その信仰を伝えるために福音書の中に書き記されたということです。最初の弟子たちの教会の中で伝えられて来たこの物語と出会い、それを福音書に書き記したルカの喜びに満ちた心の躍動を感じ取りたいと思います。

ルカ福音書の著者が、エマオに向ったこの二人の弟子の物語を福音書の中に書き記した意図は明らかです。確かに私たちは復活の主をこの目で見ただけではないかもしれない。けれども、復活の主があの人々の目を開くために行ってくくださったことは、私たち自身が経験していることではないかと、この物語を通してルカ福音書は主張しているのです。たまたま道連れとなった、行きすがりの旅人だとばかり思っていた復活の主が解き明かしてくくださった聖書のことばは、私たちも今聴いているではないか。エマオの宿で復活の主が二人

の弟子に裂き与えたパンを、今私たちも味わっているではないか。復活の主があの人々の弟子にしてくださったことは、今私たちが教会の中で経験していることそのものではないか。あの人々の弟子が彼らの道連れとなってくださった復活の主と出会うことができたように、私たちも今この教会において、復活の主と出会うさせていただいているのだと今日の福音は私たちに告げているのです。肉の目をもって復活の主を見ることが出来るかどうかが重要であるのではない。あの人々の弟子も、自分たちの前におられるその方がイエスだと分かったその時、それまでのイエスの姿は彼らの目には見えなくなった。けれども、そのことが彼らを狼狽させることはなく、全てが夢物語に終わることなく、彼らはその足で、そこから自分たちが逃げ出すように分かれてきた弟子たちのもとに戻り、その弟子たちの集いの中で、自分たちと道連れになってくださったあの方が、復活の主その方であることを確認できたのだ。彼らのあのエマオへの旅の真の到着点はそこにあった。これら、全てのことは、私たちが復活の主を信じる私たちの信仰において経験していることなのだと、ルカ福音書の著者は、熱い想いをこめてこの信仰の物語を伝えているのです。ルカ福音書のこの物語に込められた熱い想いに満ちたメッセージが私たちの心に伝わる時、私たちもこの物語の人々の弟子たちのように、そしてまた、福音書に書き記されたこの物語を自分たちの信仰の物語として受け止めてきた無数の私たちの信仰の先輩たちのように、この教会の中で、その中心であるミサにおいて、復活の主との出会いを経験するのです。

私たちが洗礼を受けてカトリック信者となることが出来たのは、復活の主イエス・キリストが、私たちにもそれと気付かぬうちに道連れとなってくださったからです。私たちの道連れとなってくださったイエスは、あの人々弟子の心を開いて、彼らの胸のうちにわだかまっていたイエスの十字架の意味を悟らせてくださったように、私たちの目をご自分の十字架に向けさせてくださったのです。そのことによって、私たちは、自分とは関わりがないと思って来たイエスのあの十字架が、私たちの人生に関わるものとして、私たちの中につの間にか根を下ろしていることを経験したのです。それは、あの人々にとってそうであったように、十字架の死を超えて復活された主が私たちの中にもたらしてくださったことです。洗礼によって私たちが経験したことは、あのイエスの十字架の苦しみの死は、神の子であるイエスが私たちのために、私たちに代わって、自ら引き受けてくださったものであることを悟ることが出来たということだったはずですが。その時、私たちは決定的にイエスの十字架と結ばれたのです。そのことによって、私たちはこの自分をそれほどまでに愛していただく神の愛を経験したはずですが。その時から、私たちは自分の行く手に如何な

る苦難が待ち受けていようとも、自分が受け入れたこの信仰によって、十字架の死を超えて復活されたイエスとともに歩むなら、それら全てを乗り越えることが出来るとの希望の確信を与えられたはずです。あの十字架において、イエスはその血の最後一滴まで流しつくすことによって、神の子としてのいのちを私たちに与えてくださったのです。あの二人の弟子の心を燃え立たせたように、これら全てのことが、復活の主の息吹によって私たちの心を燃え立たせる時、私たちはミサの度ごとにいただくご聖体のパンのうちに、私たちのために十字架につけられ、復活された主イエスの愛のいのちの尊さ、ありがたさをこの身にいただくのです。

私たちの信者としての生活を振り返ってみると、私たちも、エマオに向った二人の弟子たちのように、信仰共同体の仲間たちのもとを離れ、あてもなく、私たちのエマオを目指してしまうことがないわけではありません。そのような時にも、あの二人の弟子のたちにとってそうであったように、私たちの心からイエスの十字架がもたらした衝撃の重さが消えてしまうことのないようお願いしたいと思います。そのような私たちのもとに復活されたイエスが寄り添ってくださって、私たちには謎となってしまったイエスの十字架の意味を、もう一度あらたに悟らせてくださる恵みを祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高